

教員養成大学における学生主体の音楽アウトリーチ活動 —京都教育大学「どれみふぁそったくん」の10年間—

檜下 達也・鈴木 淳之介*・田邊 織恵**

Student-Led Music Outreach Activities in a Teacher Training University: A Decade of “Doremifa-Sottakun” at Kyoto University of Education

Tatsuya KASHISHITA, Junnosuke SUZUKI* and Orie TANABE**

Accepted June 18, 2025

抄録：本稿の目的は、京都教育大学（以下、京教大）の学生団体「どれみふぁそったくん：子どものためのアウトリーチ」の2015年度から2024年度の10年間にわたる活動を整理して報告し、音楽教員養成の視点からその活動の意義を示すことである。過去10年間の活動を整理すると、2015年度から2019年度は「授業内型アウトリーチ」が行われることが多く、2020年度から2024年度は「演奏会型アウトリーチ」が行われることが多いことが明らかとなった。これは、2020年前後のコロナ禍という社会情勢の影響を受けながら、学生たちがさまざまな工夫によって活動を継続してきたことの結果であることが示唆される。また音楽教員養成の視点から見たとき、京教大の音楽領域専攻の学生の多くが参加するこの活動は、学生の自律的で協働的な学びの場として機能し、音楽教員としての実践的技能の習得の場となっていることが指摘された。

索引語：音楽アウトリーチ、教員養成課程、音楽教員

Abstract: This study documented and examined the significance of a decade (2015–2024) of music outreach activities conducted by “Doremifa-Sottakun: Outreach for Children,” a student-led organization at Kyoto University of Education (KUE), from the perspective of music teacher education. Analysis of the activities revealed a shift from “in-class outreach” being predominant from 2015 to 2019, to a focus on “concert-style outreach” from 2020 to 2024. This transition suggests that students adapted creatively to the social changes brought about by the COVID-19 pandemic in 2020, finding ways to sustain their activities under novel constraints. From the viewpoint of music teacher training, the initiative, which involved a large number of students majoring in music at KUE, functioned as a space for autonomous and collaborative learning. “Doremifa-Sottakun” also served as a valuable opportunity for students to develop practical skills essential for future music educators. The findings underscore the importance of student-driven outreach programs in fostering both personal growth and professional competence in music teacher education.

Key Words: Music outreach activities, teacher training course, music teacher

* 金沢大学大学院人間社会環境研究科地域創造学専攻

** 京都教育大学非常勤講師

1. はじめに

本稿の目的は、京都教育大学（以下、京教大）の学生団体「どれみふぁそったくん：子どものためのアウトリーチ」（以下、「そったくん」）¹⁾ の 2015 年度から 2024 年度の 10 年間にわたる活動を整理して報告し、音楽教員養成の視点からその活動の意義を示すことである。

「そったくん」の活動はのちに詳述する京教大「e-Project @ kyokyo」（以下、e-Project）の団体の一つとして過去 10 年間にわたり継続してきた音楽アウトリーチ活動である。音楽アウトリーチとは、「音楽家や音楽団体・機関が、普段音楽に触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及すること」と定義され、「音楽の提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむ双方向的な活動というスタンスが特徴」である（林 2013：6）。

日本国内では大学生による音楽アウトリーチ活動が盛んに行われている。日本の音楽アウトリーチに関する研究を牽引してきた林睦によれば、その動きは 2001 年ごろから音楽大学を中心に活発化した（林 2013：10）。よく知られるところでは、2001 年度から神戸女学院大学音楽学部においてアウトリーチの授業が開始され、学内にアウトリーチ・センターが設立された。同大学ではこのセンターを窓口として地域における音楽アウトリーチ活動が行われている。他にも 2006 年度から昭和音楽大学で、2005 年度からは東京音楽大学で、それぞれ特色ある音楽アウトリーチ活動が行われている（同：10）。教員養成大学でも同様の動きは見られ、2004 年から静岡大学教育学部が、2005 年からは滋賀大学教育学部が音楽アウトリーチ活動を何らかの形で開始した（同：10）。近年も大学生による音楽アウトリーチ活動は活発に行われている。

以上のような大学生による音楽アウトリーチ活動の先行事例に対する「そったくん」の特長を述べるとすれば、学生の自律性の高さが挙げられる。この活動は単位認定される授業ではなく、あくまでも学生の主体的活動として行われ、大学から支給される活動資金である研究経費を活用する以外、その目標設定から運営までの全てについて、基本的には学生の自律的な判断に基づいて行われる点に特長がある。もちろん、大学内の学生活動であるため助言教員は存在するが、とくに近年は学生たちの自律性がより顕著になる傾向があり、広報活動、依頼者との連絡、演奏活動に至るすべてのプロセスを学生主体で実行している。つまり、授業や単位とは切り離された状態、すなわち大学のカリキュラムからは完全に独立し、活動資金の援助以外のほとんど全ての活動が学生の自律的運営によって進められるのが「そったくん」の特色であると言える。2025 年度以降は助言教員が交代する予定であり、10 年間の活動記録が蓄積した今、この特色ある音楽アウトリーチ活動についてまとめ、学内外に向けて公表しておくことは価値あることであると考えられる。

本稿が主に参照するのは過去 10 年間の「報告書」である。e-Project に採択された活動に対しては年度末に活動報告書の提出と研究発表が義務付けられている。報告書は大学の web サイトに掲載され、過去 10 年間の活動をたどることができる。また本稿執筆者の鈴木は 2021 年度から 2024 年度までこの活動において中心的な役割をつとめた²⁾。したがってこの直近の 4 年間についてはとくに詳細な活動の記録、すなわち練習の様子や依頼者との連絡の記録等をたどることが可能である。また田邊はこの 10 年間の活動において一貫して助言教員をつとめ³⁾、学生たちの活動を最も近くで支えてきた立場から「そったくん」の過去の活動について報告する。檜下は音楽教育研究を専門とする立場から「そったくん」の活動について、音楽教員養成との関

わりからその意義を考察する。以上のような各種記録と、本稿執筆メンバーのそれぞれの立場からの考察によって 10 年間の活動を報告する。

2. 学生団体「どれみふぁそったくん」の概要

(1) 学内における位置付け

「そったくん」は京教大 e-Project に採択された学生団体である。e-Project とは、学生の「独創的で想像力豊かな研究活動や取り組みを奨励」する大学独自の学生支援プログラムである（京都教育大学 web サイト）。学生生活委員会がその採択の審査等の運営を行い、事務は学生課が分掌する。学生が申請するプロジェクトは、研究の要素を含んでいれば、科学、文学、芸術、体育等、分野を問われず、学生生活委員会における審査を経て採択されると、年間 150,000 円を限度に研究経費として資金的援助を受けることができる。2024 年度は七つのプロジェクトが採択された。「そったくん」は 2015 年度に採択されて以来、2024 年度まで途切れることなく継続して採択され活動してきた。

各年度末には各団体に研究報告書の提出が義務付けられ、これが京教大 web サイトに掲載される。また研究発表会が開催され、各プロジェクトの学生がそれぞれの成果報告を行う。この発表会には奈良教育大学と大阪教育大学からも学生等が遠隔参加する。発表会では教員と学生からなる審査委員会により優秀なプロジェクトが表彰される（京都教育大学 web サイト）。「そったくん」は、2021 年度から 2024 年度の 4 年間連続で最優秀賞を受賞した。また他大学からの参加者も含めた一般観覧者による投票で最多票数を集めたプロジェクトには「そったくん賞」が授与されることになっている。「そったくん」は、この「そったくん賞」も 2022 年度以降 3 年連続で受賞している。10 年間という長期間にわたって継続してきた活動の実績によって蓄積されてきたノウハウを活かし、近年はその内容もますます充実していることが、こうした各賞の受賞に繋がっており、学生の自律的活動によって行われる特色ある研究として、学内においては高く評価されているのである。

また「そったくん」は京教大音楽科との関係も深い。2024 年度「そったくん」の活動は 56 名の学生で構成されており、そのうち 51 名が音楽領域専攻の学生であった。同年度の音楽領域専攻の学生は 59 名なので、9 割弱の専攻生が「そったくん」に参加していたことになる。本稿全体のまとめでも指摘するように、今やこの活動は、授業や単位と関わる意味でのカリキュラムからは独立した活動でありながら、京教大における大学生活全体を通しての音楽教員養成という、より大きな枠組みのなかで、重要な教育機能をもつ活動となっている。

(2) 活動の目的と運営体制

「そったくん」の活動目的は、10 年間を通して多少の文言の違いはあるものの、その内容にはほとんど変化がない。その活動目的は以下の通りである（2015 年度報告書：1）⁴⁾。

地方の小学校、及び医療施設、学童保育の子どもなど、普段、生の演奏を聞く機会の少ないと思われる子ども達に向けて出張で演奏会を行い、音楽の楽しさ、おもしろさを感じ、感

動体験となる機会を提供する。実施内容は、鑑賞会にとどまらず楽器のしくみ、音楽の歴史について楽しみながら知る学習の面も持ったものとし、同時に、それぞれのニーズにどう応じられるか、企画者側の意向をどこまで実施できるかを報告する。

このように、「そったくん」の活動目的として、学校のみではなく幅広い施設を対象にして演奏を届けること、学習の面をもつこと、企画者側の意向を実現することが挙げられている。

次に直近の4年間の活動に焦点を当てて運営体制を概観する。運営メンバーは、「そったくん」の構成員のうち希望した学生が担当する。例えば、2024年度の運営メンバーは、1回生が1名、2回生が2名、3回生が4名、4回生が1名の計8名であった。このうちから1名以上が代表者として選出され、2名以上が担当した年度もあった。代表者は主に学生課との連絡窓口の業務を行う。

運営メンバーの主な仕事は、大学への書類提出、広報活動、依頼者との連絡、プログラム作成、活動毎の演奏者（参加者）の決定、練習日の調整、練習の進行などが挙げられる。

運営メンバーが大学に提出をする書類は、企画書、経費使用に関する書類、そして研究報告書がある。企画書や、活動の評価に関わる研究報告書は、運営メンバーの複数人で分担し確認しながら作成する。経費使用に関する書類は、各運営メンバーが担当する依頼に応じて大学に提出する。経費については次項で詳述する。

広報はチラシ、webサイト、SNS等によって行われる。チラシは研究経費を用いて発注される。依頼者はこのチラシに記載されたQRコード、webサイトやSNSのリンクから、演奏依頼用Googleフォームにアクセスできる。この演奏依頼用Googleフォームに記入して送信することで、「そったくん」への依頼が完了する。Googleフォームには、依頼者の氏名と所属する団体、対象の子どもの年齢や校種、おおよその人数、音楽アウトリーチ活動を希望する日時を記入する項目が設けられている。加えて、具体的な依頼内容などが決まっていればその内容も記入する。最後に、「そったくん」を知った経緯と音楽アウトリーチ活動当日の撮影を許可するかどうかを選択する。Googleフォームの情報は運営メンバーによって確認され、担当者がメールで返信をする。このGoogleフォームを用いた依頼方法は2022年度から導入され、大学とはつながりのなかった施設からの依頼が増える契機になった。

依頼者との連絡は、運営メンバーから選ばれた1名または2名の担当者が行う。連絡内容は主に日時とプログラムの確認であり、電話や直接対面してのやり取りが行われることもある。プログラムの内容は、演奏時間、子どもの年齢、依頼者の希望、参加する構成員に合わせて内容を決定する。

この依頼者とのやりとりと並行して、「そったくん」の構成員から出演者の決定が行われる。担当者は構成員全員が所属するLINEグループ⁵⁾に、演奏者決定用のGoogleフォーム⁶⁾を送信する。活動に参加したい構成員はフォームに記入して送信することで参加の意志を示し、担当者は新たに作成する活動ごとのLINEグループに希望者を参加させる。そこで練習日程やプログラムの調整が行われる。また音楽領域専攻の学生控室で、担当者が出演者を募集することも頻繁に行われている。

(3) 活動経費

「そったくん」は、京都教育大学 e-Project の研究経費によって活動している。研究経費を使用するためには、経費使用に関する書類の提出が必要である。大学からの援助は 1 年度あたり 150,000 円が上限である。使用用途は研究に必要な物品の購入や交通費支給、または大学に返却できるものに限定され、適切な使用用途かどうか学生課のチェックを受ける。e-Project の研究期間は、企画が採択された 5 月下旬から 12 月末のため、1 月から 3 月の活動に対しては経費が使用できない。

2024 年度の資金についてまとめた【表 1】を見ると、研究経費の使途は消耗品と交通費が大きく占めていることが分かる。2024 年度は、過去 10 年間で最多となる 21 件の依頼を受け、交通費は 1 回の音楽アウトリーチ活動で 10,000 円を超えることもあった。その結果、交通費だけで 102,990 円を使用しており、使用経費の総額 131,585 円の大部分を占めた。交通費の他には、楽譜の印刷費や木管楽器を演奏する際に使用するリードなどを消耗品として購入していた。

2024 年度以前では使用経費が上限である 150,000 円に近づくことは少なく、金銭的な余裕があったため様々な経費使用の用途が見られた。例

えば、2022 年度は楽器運送会社に楽器運搬を依頼し、マリンバやドラムなどの大型楽器を依頼先へ運搬した。これは個人で運ぶことができなかった楽器の使用を可能にし、より多くの楽器を用いた音楽アウトリーチ活動を実現した。

表 1 2024 年度どれみふぁそったくん経費使用一覧

費目	品目	数量	単価	小計
消耗品	楽譜フォルダー	5	678	3,390
	マスキングテープ（2 個入り）	1	773	773
	リード	1	3,850	3,850
	色画用紙（2 セット入り）	1	523	523
	楽譜作成ソフトウェア MuseScore	1	5,999	5,999
印刷費	楽譜	546	10	5,460
交通費	京教大から各実施先までの合計	-	-	102,990
合計				131,585

3. 「どれみふぁそったくん」の 10 年間の活動

(1) 授業内型アウトリーチと演奏会型アウトリーチ

本節では「そったくん」がこれまでどのような音楽アウトリーチ活動を行ってきたのか、各年度の報告書と助言教員の記録から明らかにする。2015 年度から 2024 年度の 10 年間の報告書を調査すると、実施された活動内容の特徴によって二つの時期に区分することができる。すなわち授業内型アウトリーチが特徴の第 1 期（2015 ～ 2019 年度）と、演奏会型アウトリーチが特徴の第 2 期（2020 ～ 2024 年度）である。

授業内型アウトリーチとは、音楽アウトリーチ活動の実施主体者が、教科としての音楽科の授業内に入り、ゲストティーチャーや指導者として音楽アウトリーチ活動を行うものを指す。特定の題材や教材が使用され、授業における学習のめあてなどが提示される。

演奏会型アウトリーチは、音楽アウトリーチ活動の主体者がプログラムの提案や進行を主導

し、授業外で行われるものを指す。小学校などの教育機関以外の音楽アウトリーチ活動は、全てこの演奏会型で実施される。小学校や特別支援学校においても演奏会型アウトリーチは実施されるが、その場合も学習のめあてなどが明示されることはなく、教科書掲載曲以外にも様々な楽曲を演奏する。

「そったくん」が行った 2015 年度から 2024 年度の音楽アウトリーチ活動について、授業内型アウトリーチと演奏会型アウトリーチに分けて整理したものが【表 2】である。小学校と特別支援学校以外のものは、備考欄に活動した施設や対象の子どもについて記載した。この表からも分かるように、授業内型アウトリーチ活動は、2015 年度から 2019 年度で合計 8 件実施した。これに対して 2020 年度から 2024 年度を見てみると、授業内型アウトリーチは 1 件である。このように見ると、第 1 期と第 2 期では活動の内容が変化していることが分かる。

表 2 2015 年度～2024 年度の音楽アウトリーチ活動の実施状況

	年度	活動件数 (総数)	授業内型 アウトリーチ	演奏会型 アウトリーチ		
			小学校 特別支援学校件数	小学校 特別支援学校件数	小学校・特別支援学校以外 件数	備考
第 1 期	2015	3	2	1	0	【該当無し】
	2016	4	1	1	2	・幼児対象・特別支援が必要な子ども対象
	2017	2	0	1	1	・幼児対象
	2018	9	5	0	4	・児童館・幼児対象
	2019	2	0	0	2	・児童館・保育園
第 2 期	2020	0	0	0	0	【活動無し】
	2021	2	0	1	1	・地域のお寺
	2022	4	0	2	2	・幼児対象
	2023	9	0	2	7	・特別な支援が必要な子ども対象・児童養護施設・地域のお祭り
	2024	21	1	2	18	・児童館・地域のお寺・保育園・幼稚園・幼児対象・ピアノ教室・特別な支援が必要な子ども対象・児童養護施設・本大学学園祭・地域の子ども対象
合計		56	9	47		

表注) どれみふぁそったくん報告書 2015 年度～2024 年度から作成

(2) 第 1 期 (2015 年度～2019 年度) 授業内型アウトリーチ

ここでは第 1 期にあたる 2015 年度から 2019 年度の状況を確認する。初年度にあたる 2015 年度、田邊は担当していたゼミ生から「卒業後は公共ホールに就職し、子ども向けの音楽会を企画したい」と相談を受けた。そこで大学の学生プロジェクトを紹介し、本活動は始動した。これまでに、田邊は声楽家として毎年オーケストラと共に全国の学校公演で司会や歌手を務めており、曲の選定や公演の構成、演出について一定の知見を有していたこともあり、助言教員として本活動に関与することとなった。まず、子ども向け学校公演の在り方を理解するために、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールの関係者に協力を仰ぎ、同ホールの声楽アンサンブルによる学

校公演への立ち会いの機会を得た。また、他大学におけるアウトリーチ活動の事例を調査し、本活動の基盤となるモデルを模索した。

さて、第1期の各年度の報告書には、授業内型アウトリーチと関わる文言が多く見られる。例えば2015年度報告書には「意図していた演奏会の形式ではなく、ゲストティーチャーとして演奏をしてほしいと希望する学校が多かった」と、授業内型アウトリーチの要望が想定よりも多かったことが記されている（2015年度報告書：6）。その内容は、学生はゲストティーチャーとして参加し、授業の進行を学校の教員に任せるといったものだった（2015年度報告書：3）。

翌2016年度には授業の進行自体を「そったくん」の構成員が行うようになったことが報告書には記されている（2016年度報告書：2）。2017年度の活動においては、レパートリーがまだ十分でなく、曲目の選定や楽譜の収集が試行錯誤の段階にあったが、学生たち自身の手で公演の構成を考案するようになった。授業内型アウトリーチを5件行った2018年度には、構成員が「授業案の考案、教具やワークシート等の作成」だけでなく、授業者までも務めている（2018年度報告書：2）。また同年には本活動の主要メンバーは大学院生となっており、教育実習などの経験から、教科書に掲載されている指導内容をもとに授業者および演奏者の両方の立場で活動に参加することが可能となった。

以上のように、第1期は、授業内アウトリーチの参加者が音楽科教員の立場で音楽アウトリーチ活動を行ったことが分かる。学生が授業の準備から実施まで授業に関する全てを行う活動となっていたのである。この取り組みは、現場において生演奏を導入したいと考える学校側のニーズに応えるものであると同時に、学生にとっても演奏の場を得るだけでなく、授業の展開方法を学び、子どもたちの反応を直接観察することができる点で有意義であった。

第1期の報告書から分析すると、この授業内型アウトリーチに関する変化の一因として、2016年度から2019年度の4年間にわたり、「そったくん」の代表を、一人の学生が連続で務めていることが挙げられる。この学生は、2018年度の授業内型アウトリーチ5件全てに参加し、全活動で授業の進行を取り仕切る役割を担っている。この学生個人の経験の蓄積が、2018年度のような、授業準備から授業者の役割までも全て担う授業内アウトリーチを可能にしたと考えられる。

しかし、2019年度には急激に音楽アウトリーチ活動の実施数が減少した。前年度には9件だった実施数が、この年には2件であった。2019年度の報告書によれば、「6件程活動を予定していたが、奏者の確保が難しく、実施することが出来なかった」という（2019年度報告書：4）。田邊の記憶によれば、2019年には代表を務めた学生が大学院生になっていたため学部生の構成員との間で交流が希薄化し、その影響により、従来のような形での活動の継続が徐々に難しくなった。さらに2020年4月16日には新型コロナウイルスの流行を受けて全国緊急事態宣言が発表された。これにより、依頼を受けることそのものが困難になったのである。

（3）第2期（2020年度～2024年度）演奏会型アウトリーチ

2020年度はコロナ禍の影響を受け、依頼数は0件であった。社会全体のなかで演奏活動そのものが制限されるなか、学生の士気も低下し、構成員の減少が顕著となった。そのような環境下でも活動を継続するために、仮想の演奏会を企画し、レパートリー拡充に向けてメンバーで練習を重ねた。

2021 年度には、コロナ禍の影響が徐々に落ち着きを見せるなか、本活動の元構成員であり音楽領域専攻であった卒業生から、依頼が寄せられた。依頼者の勤務先である大阪府の特別支援学校において、コロナ禍により音楽会がすべて中止となった学年の生徒に対し、音楽の素晴らしさや楽しさを伝えてほしいという依頼であった。本活動が卒業生を通じて教育現場に還元される形となったことは、意義深いことであった。2021 年度は、特別支援学校と地域の寺院での 2 件の演奏会型アウトリーチをしており、ほとんどが 1 回生と 2 回生のみで行う活動であった。

2022 年度は、コロナ禍で中止されていた京教大幼児教育専攻が主催する「うたとおはなしの会」が再開し、「そったくん」メンバーもこれに参加した。この会は附属図書館内において、幼児を対象に、音楽会や人形劇などを披露している会である。また特別支援学校からも「コロナ禍の影響で校外での音楽会を開催することが難しく、子どもたちに生の音楽を聴かせてあげたい」という依頼があった（2022 年度報告書：2）。また、小学校から「コロナの影響で小学校向けの演奏会などが開催されていないため、子どもたちに生の音楽を聴く体験をしてほしい」という依頼があり、1 時間を超える演奏会型アウトリーチの活動を行った（同 2022 年度：4）。

2023 年度以降も着実に依頼数を増やし、2024 年度には本活動を始めてから最多の 21 件の依頼を受けた。その内容は、1 件を除いた 20 件が演奏会型アウトリーチであった。

以上のように第 2 期は、演奏会型アウトリーチが授業内型アウトリーチと入れ替わるように増えていった。その要因として、社会情勢の変化、すなわちコロナ禍が挙げられる。すでいくつかの事例を紹介したように、コロナ禍においては、子どもたちが学校の行事で、生演奏を聴く機会が著しく減少したことから、その後、社会における音楽活動への懸念が緩和するにしたがい演奏会型アウトリーチの需要が増えたのである。また 2022 年度と 2023 年度の連続で同一人物が代表を務めていることにも着目したい。第 1 期と同様に、同じ人物が続けて代表を務めることで演奏会型アウトリーチの経験や活動内容の蓄積が起きたと考えられる。

一方、第 2 期ではとくにその後半において実施件数そのものも顕著に増加した。その要因の一つには構成員の増加が挙げられる。2015 年度から 2024 年度の構成員数を示した【表 3】によると、構成員数は 2020 年度に 7 名まで減少したが、2021 年度から 2024 年度にかけ 56 名まで増加している。構成員の増加は依頼者との仲介を行う者の増加を意味する。というのも、教育大学の学生は教育実習やインターンシップ、教育ボランティアや教育支援員、児童館でのアルバイトなど、さまざまな形で教育現場とつながっており、彼らが教育現場と本活動をつなげ、依頼件数が増加したからである。また構成員の増加は同時期に複数の依頼を受けることも可能にした。2024 年度は、11 月に 6 件、12 月に 5 件と短期間に複数の音楽アウトリーチ活動を実施した（2024 年度報告書：7-14）。構成員が多ければ、同時期に依頼が集中しても、数人ずつにグループ化して分担すれば対応できるのである。もちろん、実施件数の増加の要因として、すでに述べた広報活動の改革も重要であった。2022 年度から web サイトでの広報と Google フォームを活用したことで大学と直接つながりのなかった施設からの依頼も増えたのである。

以上、本節では「そったくん」の過去 10 年の活動について概観した。

表 3 「そったくん」の構成員数

年度	構成員数
2015	23
2016	20
2017	17
2018	22
2019	20
2020	7
2021	18
2022	32
2023	43
2024	56

表注) どれみふぁそったくん報告書 2015 年度～2024 年度から作成。

本活動ではこの10年間で56件の音楽アウトリーチ活動を実施した。依頼数はコロナ禍で一時的に減少したものの、その後は着実に依頼数を増やし続けている。またその活動内容も、第1期の授業内型アウトリーチから第2期の演奏会型アウトリーチへと変化したのであった。これは、社会情勢の変化や依頼内容の変化に組織として柔軟に対応してきた結果である。このことは、10年間の活動の積み重ねのなかで、「そったくん」の活動が、柔軟性をもつ組織として着実に成長してきたことを示している。

4. 2024年度の活動の実際：児童館への音楽アウトリーチ

(1) 依頼と準備

本節では、2024年6月に音楽アウトリーチ活動を実施したA児童館での活動に着目し、依頼を受けてから音楽アウトリーチ活動を実施するまでの記録と、実施後の様子を報告する。報告をまとめるにあたっては、「そったくん」の構成員のうち、この依頼を担当した学生と依頼者の間の連絡記録やこの活動に参加した構成員への聴き取り、当日の録画資料等を総合して記述する。

A児童館では構成員Xが補助員として勤務しており、2024年2月24日と4月6日にはすでに運営メンバーYと、このXが館内での音楽会を実施していた。その後、YがA児童館の職員に「そったくん」の活動を紹介したことが、この依頼につながった。Yは声楽を専攻しており、すでに音楽会を実施していたこともあって子どもたちからは「歌のお兄さん」として親しまれていた。4月25日、A児童館から正式にYを通して音楽アウトリーチ活動の依頼があった。実施日は6月19日で、1時間の枠が設けられ、対象は乳幼児から小学生とその保護者であった。「楽しいステージにしてほしい」との要望であり、子どもたちと一緒に口ずさめるような歌をリクエストされた。

Yが演奏者決定用のGoogleフォームを、「そったくん」全体のグループLINEに送信し、参加希望者を募った。その結果、1回生7名、2回生3名、3回生が3名の計13名が参加することとなった。1回生は全員が初めての参加であった。練習日は5月7日、10日、14日、17日、28日、31日であった。その内容は運営メンバーのうちA児童館の担当者と連絡をしているYが決定した。5月14日にプログラムが確定した。プログラムの決定に際しては、運営メンバーが内容を確認し、時間配分や曲の順番などを調整した。その後、A児童館側の担当者にプログラムを確認してもらい、あわせて同館が所有する子ども用の楽器の貸し出しも依頼した。

5月28日の本番を想定した通し練習には助言教員の田邊が参加し、初めて参加する1回生に向けて、演奏技術および演奏時の表情や楽器の見せ方など、パフォーマンス全体に関するものを中心に助言を行った。

(2) 当日の本番前の様子

A児童館での音楽アウトリーチ活動の実施日、構成員は電車でA児童館へと向かった。実施場所は、子どもたちが日常的に使用している遊戯室で行われた。遊戯室内はA児童館の職員によって【図1】に示したように配置された。子どもたちの席としてマットが敷かれ、その範囲内を自由に移動できるような配置であった。演奏をする場所とマットの間には、子どもたちが普

段使用している長椅子が仕切りとして設置された。ピアノはA 児童館にある電子ピアノを使用した。遊戯室の演奏者側の壁に「どれみふあそったくん」と書かれた文字とイラストが描かれた紙が貼られるなど、A 児童館が「そったくん」のために特別な装飾を施していた。

音楽アウトリーチ活動に参加した子どもは1年生から3年生で20名程度、保護者は6名程度であった。参加を希望した子どもたちと、その保護者が会場に足

を運び、音楽アウトリーチ活動に参加した。本番前には大学生もマットに座り、子どもたちとの交流を図った。参加した子どもたちは友達同士で遊んだり会話をしたりしていた。

音楽アウトリーチ活動が始まる前に、ウェルカムミュージックを行った。ウェルカムミュージックは子どもの緊張を和らげ、子どもと大学生である構成員との交流を図るために行うものである。また、これは開始時刻より準備が早くでき、時間に余裕がある場合などに行われるため、プログラムに組み込まれていない。選曲は構成員が暗譜している曲や、スマホなどに保存しているコード譜や楽譜を見ながら即興的に演奏する。ウェルカムミュージックは、何度も音楽アウトリーチ活動を経験している上回生の構成員が実施することが多い。今回は「そったくん」の運営メンバーであるピアノ専攻の1名とYを含む声楽専攻2名の計3名が担当した。ここで演奏した曲は、演奏者がその場で自由に楽曲や演奏形態を決めた。

Yは子どもとこの児童館で音楽会をしたことがあったため、当初から子どもたちと親しく関わり、一緒に遊んでいた。ピアニストが《きらきら星》を弾くと、Yが楽器体験で用いる鈴を持ちながら歌ったりテンポに合わせて鈴を鳴らしたりした。次に《小さな世界》をピアニストが弾くと、一人の子どもが「知ってる!」と言った。学生が「なんて名前?」ときくと、子どもが「イツアスモールワールド!」「知らない」などと口々に会話していた。この3名の学生は遊戯室の前方におり、床に座って子どもと目線を合わせて歌ったり喋ったりした。Yとじゃんけんをして遊んでいる子どももいた。ピアニストが《さんぽ》を弾きはじめると、「あるこー、あるこー」と子どもが歌い、大学生も歌い始め、周囲にいる者みんなでの斉唱となった。その周りには歌を聴いているだけの子どももいた。

《さんぽ》が終わった後には、Yと子どもで再びじゃんけんが始まった。じゃんけんで遊んでいるYと子どもたちを見て、《やきいもじゃんけん》の演奏がはじまる。Yは前回の音楽会で、《やきいもじゃんけん》をしていたため、児童もYも瞬時に歌うことができた。もう一人の構成員も子どもの前に出て、子どもに振りやタイミングをはっきりと伝えるように歌い踊っていた。最後の「じゃんけんぽん」では、子どもも含めて全員で声を合わせて大きな声を出しており、全力で《やきいもじゃんけん》で遊んでいるようだった。この《やきいもじゃんけん》は他の音楽アウトリーチ活動でも実施しており、3回繰り返しながらだんだん速さをあげていくのが定番である。速さをあげていくごとに子どもの声が大きくなり、音楽の雰囲気も盛り上がっていった。ウェルカムミュージックでは1曲ごとの拍手などはなく、どの音楽にも明確な始まりと終

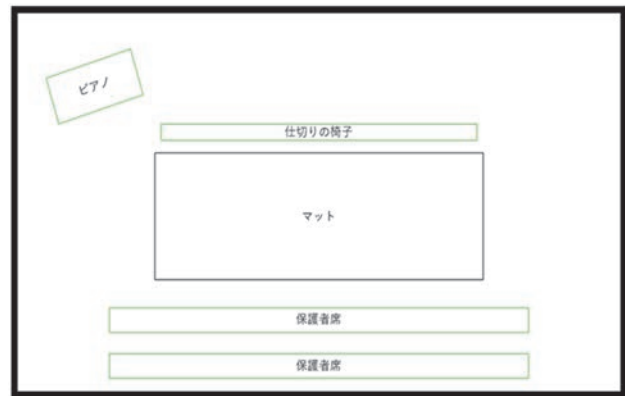


図1 A 児童館の配置

わりが存在しない。この曖昧に流れる時間が参加者を打ち解けた雰囲気へ導くのである。

(3) 本番の様子

音楽アウトリーチ活動のはじまる時間になると、ウェルカムミュージックは終了し、【表 4】に示したプログラム通りの進行に移った。司会者が「ハイ・ホー」と歌うと、他の学生はそれに合わせて《ハイ・ホー》(表 4 のⅡ-①、以下、括弧内の数字は表 4 の曲番号と対応する)を歌いながら入場をした。子どもたちも口ずさんでいた。この曲は 4 声の合唱に編曲しており、ウェルカムミュージックでは聴かれなかった頭声的な発声による厚みのあるハーモニーが会場に響いた。

表 4 A 児童館で実施した音楽アウトリーチ活動のプログラム

プログラム	曲名	作者者/作詞者/編曲者	演奏形態	学生の編曲	演奏人数
I. リズム遊び	リズム遊び	即興	ボディーパーカッション		1
II. 入場	①「白雪姫」より 《ハイ・ホー》	F. チャーチル	アカペラ	有り	13
III. どれみふあそ ったくんの紹介	②《ドレミのうた》	作詞：O. G. C ハーマス タイン 2 世/作曲：R. C. ロジャース	オーケストラ・斉 唱	有り	13
IV. 楽器紹介 弦楽器	③大盛況 (コンビニ入店音)	稲田康	ギター	無し	1
	④チャールダーシュ	V. モンティ	ヴァイオリン	有り	1
V. 楽器紹介 木管	⑤「惑星」より《木星》	G. T. ホルスト	クラリネット	有り	1
	⑥《海の見える街》	久石譲	オーボエ	有り	1
	⑦《人生のメリーゴーランド》	久石譲	サクソ	有り	1
VI. 器楽合奏	⑧《情熱大陸》	葉加瀬太郎	オーケストラ	有り	9
VII. 金管楽器	⑨《アメージンググレイス》	作詞者：J. ニュート ン/作曲者：不明	ホルン	有り	1
VIII. 楽器 クイズ	⑩《ミッキーマウス・マーチ》	G. ドット	トロンボーン	有り	1
	⑪《トッカータとフーガ 二短調》	J. S. バッハ	アコーディオン	有り	1
	⑫「動物の謝肉祭」より《水族館》	C. C. サン＝サーンス	ピアノ連弾	有り	2
IX. 声楽	⑬合唱組曲「キューブ」より 《大阪風お好み焼き》	作詞：伊藤千鶴/作 曲：吉岡裕行	四部合唱・ピアノ	無し	1
	⑭歌唱メドレー 《ふるさとの四季》	編曲：源田俊一郎	四部合唱・ピアノ	有り	13
X. 面白い楽器	⑮《天国と地獄》	J. オッフェンバック	ドレミパイプ	有り	7
	⑯《聖者の行進》	アメリカ民謡/編 曲：安永早絵子	ドレミパイプ	無し	4
XI. 子どもと一緒 に演奏	⑰《ラデツキー行進曲》	J. シュトラウス 1 世	オーケストラ	有り	8
XII. 歌と器楽	⑱《虹》	作詞：新沢としひこ /作曲：中川ひろた か	斉唱・ピアノ	有り	13
アンコール	⑲《翼をください》	作詞：山上路夫/作 曲：村井邦彦	斉唱・ピアノ	有り	13

次に《ドレミのうた》(Ⅲ-②)を演奏し、子どもも身体を動かしながら歌った。楽器も登場し、それによってさらに音量が大きくなり、音響の質も変化した。その後、一つずつ楽器を紹介した。楽器の名前を書いた画用紙を用意している段階で、子どもたちが口々に楽器の名前を言い出す。その言葉に合わせるように、司会者のYが「これはわかるかな？」などと言いながら進行した。楽器を一つずつ口頭で紹介し、その後に短くその楽器の特徴を表す曲を演奏した。この時、子どもに「楽器の名前知ってる？」と尋ねると、子ども同士で楽しそうに話し合いながら答えていた。この後、《情熱大陸》(Ⅵ-⑧)を演奏した。この曲は器楽編曲であるため、声楽曲を担当する構成員は、子どもの側に座っていた。その時に子どもが自然に大学生の膝の上に座っていた。「この曲知っている人？」と聞くと、子どもたちが手を挙げたり答えたりしていた。保護者に話しかける子どももいた。

次は合唱で《大阪風お好み焼き》(Ⅸ-⑬)を歌った。この曲は、お好み焼きの作り方を歌詞にしたもので、歌詞に出てくる食材を全て小道具で再現した。演奏者全員がエプロンを着用し、オリジナルの振付けで歌う。この曲は本来、ピアノ伴奏と合唱の編成であるが、打楽器のカホンも一緒に演奏に加わった。間奏では「なにができるのか」などとYが子どもに声をかけた。《ふるさと四季》(Ⅸ-⑭)ではソプラノやアルトなどの声域の紹介を行った。その際に、バスパートの演奏者が低い声で喋ると子どもたちが笑いながら盛り上がった。

続いてドレミパイプという楽器を用いて演奏を行った。ドレミパイプでは1回生8名による《天国と地獄》(Ⅹ-⑮)、2回生と3回生の4名による《聖者の行進》(Ⅹ-⑯)を演奏した。《聖者の行進》は1分間ほどで演奏できるため、それを3回繰り返し、速度を上げていった。3回目の最も速い演奏では「正確」には演奏できていなかったが、演奏者も子どもも楽しんでいた。演奏していない1回生は自然と子どもの側に座ってコミュニケーションをとっていた。

子どもと保護者に鈴や楽器を渡し、《ラデツキー行進曲》(Ⅺ-⑰)を演奏した。みんなで一緒にテンポに合わせて鳴らした。構成員が前に出てジェスチャーで強弱を表現し、それに合わせて子どもも保護者も楽器を打つ強さを変えた。プログラムの最後には《虹》(Ⅻ-⑱)を演奏した。この曲は歌とピアノ伴奏だけであるため、楽器だけで演奏する《ラデツキー行進曲》とは響きの質の面で大きく異なる。結果的にここでの歌声がより印象的なものになった。《虹》は合唱ではなく斉唱するため、会場全体に一体感が醸成された。歌いながらすぐ近くにいる子どもの目を見て歌っている大学生がいた。

演奏が終了すると、児童館の職員を中心とした大人たちが「アンコール」といった。構成員もそれに続き、さらに子どもも合わさった全員で「アンコール」と声をそろえた。それに応えて、《翼をください》(⑲)を歌った。実はこのアンコールはあらかじめプログラムに記載しており、時間調整の目的に加え、「アンコール」という慣習そのものを子どもたちに体験してもらう意図のもとで実施された。この時に学生が自然と子どもの側にいて、ここでも子どもが膝の上のり楽器を打ちながら一緒に歌っていた。Yが最後にお礼の言葉を伝え、A児童館の職員から「そったくん」の構成員に「ありがとうございました」と伝えられ、その場の全員で拍手をした。プログラム終了後に、大学生が楽器を集めていた。その時に子どもが構成員と喋ったり遊んだりしている姿があり、保護者からは「ありがとう」と声をかけられた。子どもが退場する時には、学生と子どもがハイタッチした。

(4) 学生と子どもの関係性の変容

A 児童館での活動における学生と子どもの関係性の変容をまとめる。まずは学生、とくに学生同士の関係の変容に着目すると、学年を越えた交流が築かれ、互いに学びを深めあう様子が観察された。この変容には、「そったくん」の演奏形態が大きく影響している。「そったくん」の演奏形態は、指揮者などの特定のリーダーを持たず、各演奏者が互いに息を合わせて協力することで成立する。ある人物は演奏中のタイミングを合わせるための合図を出し、またある人物は強弱やリズムを調整する。それは演奏をしながら音で示すこともあれば、表情や言葉で直接に示すこともある。さらに人数や配置、曲や気分にあわせて、演奏をするうえでの「リーダー」は次々と交代をしていく。このように演奏を主導する「リーダー」が移り変わるため、学年にとらわれることなく下回生でも演奏に積極的に参加することができる。大学の授業は基本的に同じ学年の学生だけで受けることが多いのとは対照的に、この活動では学年を越えて演奏技術、子どもに対する話し方や振る舞い方を学んでいる。

次に子どもたちの変容に着目すると、音楽アウトリーチ活動を通して構成員（大学生）との関係が変わっていったことが指摘できる。これはA 児童館の本番全体を通して観察できた様子である。例えばウェルカムミュージックでは、その場にいる学生が、子どもたちに合わせて即興で演奏可能な曲を考案しており、子どもは誰に言われるまでもなく、一緒に歌を歌い楽しんでいた。さらに、「歌のお兄さん」として元々子どもと交流があったYを中心に、他の子どもと構成員とのつながりが生まれ、結果的にさまざまな場面で構成員と子どもたちの活発なコミュニケーションが起こっていた。

演奏中にも、構成員は自然と子どもの側に近づいたり、会話をしたり、目線を送ったりしていた。彼らは常に子どもと交流しようとしていたのである。また、子どもたちも自ら構成員に関わりに入っていた。そのような行動を、構成員も子どもも互いに受け入れ、好意的に反応していた。最後にアンコールで《翼をください》を演奏した際には、学生が子どもの横に移動し、その日初めて出会ったにもかかわらず、子どもが自ら学生の膝に乗り、一緒に歌った。この場面には誰の強制も評価もなく、教える人と教えられる人は存在せず、ただ歌声を共有している関係だけが存在していた。

このように本番の様子を詳述すると、活動を通して子どもと学生の交流が活発に行われ、親密な関係が築かれていたことが分かる。これは学生同士の関係にも同様のことが言える。「そったくん」の音楽アウトリーチ活動の場では、「演奏する人」と「聴く人」の役割が曖昧になり、それによって人と人との結びつきが生まれる。このような状況だからこそ、構成員である大学生たちは、一人ひとりの子どもをよく観察し、その反応に応じて音楽表現や言動を適切に調整することができるのである。

5. 助言教員による助言内容と成果

ここでは、2015年の活動開始以来「そったくん」の助言教員を務めた田邊が、具体的にどのようなことを助言したのかを振り返り、その成果について述べる。「そったくん」の活動では、子どもと音楽との出会い方が最も重要である。子どもと音楽との幸福な出会いを実現するにあ

たり、以下の4点を重視するよう学生に助言してきた。

第一に、子どもの視点に立ち、飽きることなく楽しめるよう、想像力を膨らませることである。この点は活動の全体を通して言える。子どもたちの身近なものから少しずつ発展させ、その過程で学びや充実感を提供し、時間の経過を忘れるほど没入できる体験ができるようにすることが求められる。

第二に、演奏順や時間配分に配慮し、長すぎる構成とならないよう工夫することである。演奏順の工夫については、子どもの集中力や関心を持続させることと関わっている。演奏会の冒頭には、楽しいことが始まるという期待感や一体感を高めることが重要である。そのため、明るくリズムカルで、広く知られている曲を選択することが望ましい。加えて、可能な限りメンバー全員が参加できる曲を選ぶことで、視覚的・聴覚的な迫力を増し、子どもたちの関心を引きつけることも大切である。また演奏会全体を通じて、曲の緩急や演奏形態（器楽演奏と声楽演奏）のバランスを考慮することや、静かに聴かせる曲と、参加型の曲を交互に配置することで、子どもたちの集中力を維持しやすくなり、飽きることなく、最後まで演奏会を楽しむことができることなどを助言してきた。結果、現在では学生に任せても十分に考慮された曲目構成が形成されるようになった。

子どもの集中力には限りがあるため時間配分の工夫も必要である。長くとも1曲3分から5分以内におさめ、すべての楽曲を、1曲通して演奏する必要はないことを助言してきた。繰り返し部分を省略し、とくに印象的なサビの部分を中心に演奏することで、コンパクトにまとめることが効果的なのである。また、楽器紹介においても、その楽器の特徴や音色が伝われば十分であり、1分から2分程度にするよう助言した。現在では対象者の年齢層に応じて、最も効果的な部分を抜粋して短時間に収めて演奏する様子が見られるようになり、柔軟な対応ができるようになった。

第三に、曲目の選定や構成の際には、子どもたちに何を学んでほしいかという明確な教育的視点を持つことである。アウトリーチ活動では、演奏体験を通じて楽器や曲の理解を深めることは重要であると考えている。「そったくん」のアウトリーチ活動における音楽教育の要素として考えられる主なものは、次のものであろう。すなわち、①楽器の紹介と知識の提供、②オーケストラ楽曲の体験、③声種の違いと声の重なる体験、④オペラ（アリア、重唱）の鑑賞および体験、⑤指揮者体験と指揮による表現の理解の五つである。これらの活動を通じて、子どもたちが音楽に対する興味を持ち、より深い理解を深めることをねらっている。特に楽器紹介では、各楽器の特徴や仕組みなどをわかりやすく伝えることに重点を置き、弦楽器、金管楽器、木管楽器、打楽器の音の出し方や音色の違いも可能な限り近距離で見聞きできるように意識させた。選曲面では、季節に関連した曲を取り上げることで、音楽を通じて季節感を感じる工夫を行うように助言してきた。

第四に、楽曲の紹介や演出において、子どもたちの印象に残る言葉遣いや表現方法を意識し、創意工夫を凝らすことである。まず、楽曲の紹介においては、司会者が子どもたちの関心を引きつけるために曲の魅力を効果的に伝え、次の曲への期待感を高める言葉選びや表現を目指すように助言してきた。活動開始当初は台本を作成し、確認、修正を繰り返しながら進めていたが、現在では本番の経験が増えたことで、子どもたちの様子や雰囲気を観察しながら柔軟に進行できるようになっている。また子ども向けのコンサートにおいては、演奏者が楽譜を持たずに暗

譜し、子どもたちに直接語りかけるように表現することは、その場により親密な雰囲気を生み出し、一体感を感じやすくさせることにつながる。この点に関しても意識的に助言してきた。現在では本番までに暗譜することが定着している。加えて、演出の効果を向上させるために振り付けや小道具を活用することも提案してきた。例えば、表5のプログラムにもある《大阪風お好み焼き》では、歌詞に多くの固有名詞や材料名が含まれているため、聞き取りづらい可能性がある。これを解消する手段として、小道具の活用を提案した。演出効果の一つでもある服装、衣装に関しては、出演者はできるだけカラフルな色の服を選ぶように助言し、ステージ全体が明るく華やかな印象を与えることができていた。演奏表現においては、技術的な完成度を追求することは大切なことだが、子ども達に演奏することの楽しさを伝えることも重要である。そのため演奏を「必死にこなす」のではなく、「楽しんでいる」ように見せることが求められる。どんな曲、どんな楽器であっても、可能な限り前向き、笑顔で演奏することで、より親しみやすく、子ども達の視線を集中させることに繋がっている。この点も継続的に助言してきた。結果、振り付けや小道具の活用、衣装の工夫、表現における心構えなど、様々な工夫を取り入れることで、視覚的・聴覚的に楽しめるステージを作り上げることができるようになってきた。

以上、助言の際に重視した4点について報告した。これらの視点は、将来教育者となる学生にとっても重要な要素であり、本活動を通じて意識的に身につけ、教育的視点に基づいた音楽表現の在り方を学ぶ機会にもなったと考えている。この10年間、社会の変化に伴い、学生たちもさまざまな影響を受けながら、一貫して本活動の趣旨に賛同し、仲間とともに音楽を創り上げる喜びを共有してきた。また、子どもたちとの交流を通じて、アウトリーチ活動のもつ教育的価値や意義を体感し、その奥深さを実感してきたと考えられる。本活動を通じて得た経験が、今後教育現場に携わる彼らにとって、子どもたちとともに成長し続けるための礎となることを期待している。

6. まとめにかえて：どれみふぁそったくんの活動の意義

本節では本報告の総括として、10年間の音楽アウトリーチ活動の成果を、音楽教員養成の視点から考察し、まとめとする。本報告において何度も言及したように、「そったくん」の活動は大学生の自律的な学びの場となっていた。それを可能にしているのは、シンプルで明確な目標、活動するために十分な資金、学生たちに大きな裁量が保障されていることの3点であると考えられる。

この活動には、10年間変わらないシンプルで明確な目標があった。すなわちその目標の核心部分を改めて引用すると「普段、生の演奏を聞く機会の少ないと思われる子ども達に向けて出張で演奏会を行い、音楽の楽しさ、おもしろさを感じ、感動体験となる機会を提供する」というものであった。この活動における学生の行動原理を規定しているのはほとんどこれだけといって良い。全ての構成員、その中でも特に運営に関わる学生たちは、このシンプルな目標を実現するために行動している。

また「そったくん」はe-Projectの研究団体として活動することによって、大学から研究経費として活動資金が与えられてきた。もちろん研究経費は、適正に使用されるために常に学生課

の監督のもとで使用されるが、交通費と消耗品を中心に、活動のために必要なものであれば基本的には自由に使用できる。活動に対して大学から課せられる義務は年度末の報告書と研究発表会という成果報告のみであった。助言教員は本稿でも見たように演奏会の内容を中心に細やかな助言を行なってきたが、広報活動、依頼者とのやり取り、プログラム構成、練習、本番という活動全体のなかで見れば、とくに近年は演奏に関することを助言するにとどめており、その関わりは限定されたものであった。

つまり学生たちは、シンプルで明確な目標と一定の枠のもとで、大きな裁量と資金が与えられ、その環境においてさまざまなアイデアを出し合い、「そったくん」全体の活動を運営してきたのである。そして、そのような枠組みだったからこそ、学生は自律的に試行錯誤しながら運営を進め、演奏会の内容だけでなく、活動全体の運営方法をも改善しながら、次の世代へと引き継いできたのであった。

ここに生起するのが協働的な学びである。すなわち世代交代によって蓄積された多様な知識と技能が、明確な目標のもとで活用されるとき、先輩と後輩、あるいは同じ学年の学生同士による協働が実現される。とくに教員養成課程に在籍する学生たちの学びという観点から見れば、学年を越えた学びが、多様な子どもたちとの関わりの中で実現していることは重要である。

例えば、大学生になったばかりの1回生がこの活動に参加すると、教育実習や学校現場でのインターンシップを経験してきた3回生や4回生が子どもたちと関わっている様子を間近にすることができる。関わる子ども一人ひとりの様子や特徴を捉えて選ばれる言葉使い、心理的・物理的距離の取り方といったものは、教育現場における経験によってこそ身につくものであり、下回生は先輩たちの様子を見ながら徐々にその術を身につけていくのである。

一方、演奏場面における音楽の様々な力、あるいは「技」も、経験のなかで身につくものが多い。とりわけ子どもを対象とする音楽アウトリーチ活動では、本番での柔軟な判断と、判断したことを実現する演奏能力が求められる。例えば、依頼者から事前に伝えられていた子どもの姿を考慮して編曲し練習した曲であっても、本番では現実の子どもたちの反応に合わせて、あるいはその場の全体的な「雰囲気」に合わせて速度や強弱を変化させることが求められるのである。こうした柔軟な、あるいは即興的な演奏のありようは、西洋クラシック音楽を前提とする専門的な音楽教育を受けてきた音楽領域専攻の学生たちには意外に難しい。一般的にはクラシック音楽の世界では、楽譜に書いていることを解釈しながら表現を練り上げ、練習し、練習したことを本番で「完璧に」再現することをめざす。しかし子どもたちとの相互の関わりの中で音楽表現が立ち上がる「そったくん」の音楽アウトリーチ活動の場では、即興的に表現を変化させられる力量が求められる。下回生たちはここでも先輩たちの様子を見ながら、試行錯誤しながら自身の経験を積み上げていくことになる。当然ながら、こうした柔軟な演奏の技術は、学生たちが卒業後に活躍する学校音楽教育の現場では、実践的なスキルとして求められるものなのである。

このように見てみれば、「そったくん」における協働的な学びとは、いわゆる「正統的周辺参加論」で示された学びの構造⁷⁾と相似的である。すなわち共同体の仕事のより中心にいる「同僚」とともに手を動かしながら、できることから取り組み、見よう見まねで仕事を覚え、だんだんと技を身につけ共同体の「中心」へ移動していく。本稿4. (2) でもみたA児童館のウェルカムミュージックの場面では、本番前のこの時間の音楽は上回生が主に担当することを報告した。

それは、ウェルカムミュージックの時間は本番のプログラムのように事前に曲が決められ練習されるわけではなく、演奏者の経験がものを言うからなのである。下回生たちはこの場面においても、子どもたちを観察しながらその場で曲を選び、子どもとコミュニケーションをとりながら演奏そのものも即興的に変化させる上回生たちの姿を観察している。これと並行して本番における「柔軟な演奏」の経験を積み上げることで、自分もまた同様の力や技を身につけていくのである。

「そったくん」の活動においては、学生たちは大学のカリキュラムで学んだ独唱、独創、合唱、合奏、編曲の技法等をフル活用しながら、音楽と子どもたちをつなげる方法を模索している。これは学生たちが将来実際に音楽の授業を行うときに取り組むはずの、教材研究をはじめとする諸々の準備の良い訓練となっている。また学生たちは将来的にはアウトリーチを受け入れる側にもなる。地域のさまざまな専門家と協働したカリキュラムデザインの必要性が求められる昨今、音楽に限らず、さまざまな教科や校内の教育活動に、校外の専門家を招く場面があるだろう。「そったくん」の学生たちも将来その窓口教員となるはずである。彼らは「招かれる側」を体験しているので、迎え入れる側になった場合の留意点のある程度実感をもって想像できるだろう。つまり「そったくん」の活動そのものが、音楽教員をめざす学生たちにとって、学校現場で活躍するために必要な知識や技能を身につける場となっていると言える。いまや京教大音楽科の大部分の学生が参加する「そったくん」は、単位認定される授業で構成されるカリキュラムからは独立していながらも、本学における音楽教員養成における重要な役割を担っているのである。

以上、本節では音楽教員養成の視点から本活動の意義を述べた。もちろん、これ以外のさまざまな視点からも「そったくん」の意義は指摘できよう。例えば、教育活動を通じた地域の教育機関への大学の貢献という面から見ても本活動は意義深いものであるし、それぞれの活動における子どもたちの学びに目を向けて考察すれば、そこには深く音楽と関わり学ぶ子どもの個別の事例が数えきれないほどあるに違いない。いずれにせよ、10年間という長期間にわたって継続されてきた活動だからこそ、大学内外の多様な立場の関係者——子どもたち、その保護者、各教育機関、学生、大学教員、また大学にとって、意義深い内容をもつ取り組みに育ってきたといえよう。2025年度以降は助言教員が交代となり、また社会一般の状況に鑑みても、大学や教育現場を取り巻く環境はさらに変化していくと思われる。過去10年間を見ても、コロナ禍のような厳しい社会情勢を乗り越えてきた。今後も学生たちの自律的な学習の場として、そしてそれぞれの立場の人々にとって意義ある活動として継続、発展していくことを期待したい。

付記

本稿の執筆は、1. および2. の(1)が檜下、2. の(2)(3)が鈴木、3. が鈴木・田邊・檜下、4. が鈴木、5. が田邊、6. は檜下が分担した。また全体にわたる文体および用語の統一、図表等のレイアウト調整は檜下が分担した。なお、本稿の2. および3. は、鈴木淳之介『ミュージキングの視点を用いた音楽アウトリーチ活動の分析の試み』(京都教育大学2024年度卒業論文[指導教員：檜下達也])の第2章および第3章の一部を大幅に加筆修正したものである。

注

- 1) 「そったくん」は京都教育大学のマスコットキャラクターの名称である。禅に関する四字熟語「啐啄同時」（そったくどうじ）の読みから名付けられた。「どれみふぁそったくん」の名称もこのキャラクターに因むものである。
- 2) 2021 年度はいち構成員として、2022 年度と 2023 年度は代表者、2024 年度は運営メンバーとして関わった。
- 3) 2025 年 3 月まで京都教育大学専任教員として勤め、本活動の助言教員として関与した。現在は同大学非常勤講師。
- 4) 研究報告書は京都教育大学 web サイト「e-Project @ kyokyo」に掲載されている。ページ番号が記入されていないため、以降、各年度の報告書の 1 枚目を 1 ページとしてページ番号を記す。
- 5) メッセージアプリ LINE の機能の一つであり、固定メンバーによる多人数でのトークが可能である。
- 6) Google フォームは、アンケートや申込フォームなどを簡単に作成・収集・管理できる無料のオンラインツールである。
- 7) レイヴとウェンガーは、職人たちのような徒弟的な共同体における学習が、文化的共同体への参加として遂行され、共同体の周辺から中心への移動として経験されていることに注目し、そのような学びのあり方を正統的周辺参加と呼んだ（佐藤学 1996:71）。佐藤学は、学校は「最初から共同体的な関係を前提として組織されているわけではない」とし、学校教育でそのまま実践することは困難であるとしつつも、「正統的周辺参加論」は知識の脱文脈性と個人主義的な学習という、近代学校教育の枠組みに「根源的な見直し」を迫るものであると指摘している（同：71-72）。本稿で報告する「そったくん」は学生団体であり、学生の共同体的関係を前提としているため、「正統的周辺参加」と相似的な学びが生起したと考えられる。

参考文献

- 佐藤学（1996）『教育方法学』岩波書店。
- 林睦（2013）「音楽教育におけるアウトリーチを考える」日本音楽教育学会編『音楽教育実践ジャーナル』第 10 巻第 2 号，pp. 6-13.
- 「e-Project @ kyokyo」京都教育大学 web サイト，<https://www.kyokyo-u.ac.jp/student/e-project/>，（最終アクセス 2025 年 4 月 1 日）。